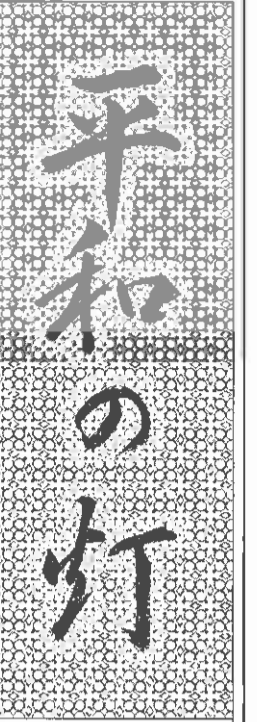


沖縄戦の背景と日本政府の対応

「生きて虜囚の辱めを受けるな」の軍命が集団自決を生んだ



題字 津留崎尚
戦没者を慰霊し 平和を守る会発行
〒849-0112 佐賀県三養基郡みやき町 大字江口7561
発行責任者 塩川正隆
電話 0942-89-5135
FAX 89-9281
e-mail senbo-peace@senbokusya.com
http://www.senbokusya.com

太平洋戦争における沖縄戦は、1944年10月10日「10・10空襲」というアメリカ軍による空襲に始まり、1945年4月1日のアメリカ軍の沖縄本土上陸から6月23日の終戦(司令官の自決)まで、敵軍方入り乱れての地上戦が行われ、民間人12万人、軍人8万人の尊い命が失われた。1943年、日本軍はミッドウェー海戦において歴史的な大敗を喫し、制海権・制空権をアメリカに奪われた。

その後、サイパン・硫黄島など南方の多くの島にいる日本軍は全滅し、敗戦は決定的となった。しかし、沖縄で戦闘は行われた。なぜか？その謎を解くカギが長野県松代にあると聞き、2008年1月28、29の両日、長野県松代にある幻の大本営を訪問した。東京から長野まで新幹線で100分、そこからバスで40分、長野県松代は、真田10万石の城下町、幕末の学者佐久間象山の生誕地でもある。標高475メートルの象山の麓に幻の大本営跡の防空壕があった。

幻の松代大本営地下壕

(幻でよかった)

幻の松代大本営地下壕は、太平洋戦争で敗色濃厚となった1944年11月、本土決戦を企て1億総玉砕などと呼び、東条英機陸軍大臣率いる陸軍首脳が、極秘に大本営を長野県松代に移しアメリカ軍と日本本土での決戦を試みようとした。1944年11月から1945年8月15日の終戦までわずか9ヶ月の間に、述べ300万人の住民及び朝鮮の人々を強制的に働かせ、総延長10キロの防空壕を造らせたものだ。しかし、昭和天皇は松代の山の中に皇居まで移すことを確認されると、いつになく激昂され、「私は松代へ行かないよ」と言われたと伝えられる。そして、1945年8月15日の終戦となる。国民に終戦を知らせたのは昭和天皇の玉音放送で行われたが、この放送をもこれら陸軍の首脳が

強制連行で 朝鮮半島から

この工事には朝鮮半島から6、000人の人々が強制連行され労働者が働かされたが、短期間に難工事を行わなければならず、過酷な労働を強いられ脱走する人までいた。犠牲者は1,000人以上ともいわれるが、定かではない。現地には、朝鮮半島出身の方々の追悼の碑が、現地の方々によって建てられ、訪れる人々の涙を誘っている。

また、工事現場には慰安所も設けられ、朝鮮半島から多くの女性が強制連行された。慰安所は、朝鮮半島出身の方々の追悼の碑が、現地の方々によって建てられ、訪れる人々の涙を誘っている。

「生きて虜囚の辱めを受けるな」が 集団自決を生んだ

日本政府は「戦後レジーム」からの脱却の名の下に、従軍慰安婦に軍の関与を否定し、沖縄における集団自決にも軍の関与は無かったと断言して、高校教科書から消そうとしたが、沖縄県民の反発を招き慌てて復活した。しかし、沖縄県民に生きて虜囚の辱めを受けるな」と、軍命を下したの

は軍であり、軍の関与は明白だ。住民に集団自決を迫り、忠実に命令を守った軍人もいた。死なざるに生きろと言った住民もいた。これは、何百年の歴史が過ぎようとして、歴史が目を覚ますという思いにより、保存されている。

沖繩戦は 大本営移転の 時間稼ぎ

このように、沖縄戦は大本営が、東京から長野県松代に移転するための時間稼ぎにすぎなかった。当時、大本営からこの作戦を知らされた沖繩県知事泉守紀氏は反対し、1944年米軍沖繩上陸が必至となると1945年1月香川県知事の発令を受け、わずか3ヶ月で退任した。(泉知事は当時任命制だった)

高校生が保存運動

この松代の幻の大本営地下壕は戦後40年塞がれ

て日本政府は放置していたが、1975年6月に長野県篠ノ井旭高校の生徒が沖繩に修学旅行に行き、沖繩ガラクチを見学して、戦争の傷跡を目の当たりにした。松代にもガラクチがある。「もう二度と戦争を起してはならない。そのためには、戦争の傷跡を示すこの壕は、平和のシンボルとして残すべきではないか」として保存運動が始まり、長野市の積極的な支援もあり1989年から一般公開された。長野県篠ノ井旭高校の取り組みは、今日も後継者に受け継がれている。



松代象山地下壕

沖繩戦終焉の地の遺体収容を

●言葉(高田俊秀)



沖繩戦を語る高田俊秀氏

友の遺体を拾われて満足されたでしょうか。それはそれでよかったです。高田さん、33回忌も終えたというのに、沖繩では、まだ祖国の勝利を信じて骨になってまで戦っている人がいっぱいいるんですよ。どうでしょうね、高田さん。その人達に今度は、命ある限り草の根を分けて戦争は終わったんだ。平和になったんだよって教えて回ろうじゃないですか。崇高な人間愛に満ちたオパアの心に、地下に接した私は、思わずひれ伏して「はい、そうします。」とだけ答えるのが精一杯であった。

「そうだとこれこそが自分に下された天命だ。」と固く心に刻み込んで30年、この言葉は、前門キヌ女の言葉として脈々と私の心に生きています。

●ある遺体収容 ●翌日の観光は取り止め、その代わり遺体を求めて摩文仁の山に分け入ることになった。合同通信所入口に立ち、はたか岩の隙間に潜り抜け、途中にある航空無線隊の陣地跡を左に見、急斜面を40メートル程降りて谷底に立つと、もうそこが第32軍合同通信所のあった所である。

●若者に託す ●平成20年1月、当会の若者に現地の発掘調査を依頼するため案内した。前門さんの健児の塔の駐車場から歩いて摩文仁の海岸へ降りて、岩壁に歩いて30分程でたどり着いた。

●若者に託す ●平成20年1月、当会の若者に現地の発掘調査を依頼するため案内した。前門さんの健児の塔の駐車場から歩いて摩文仁の海岸へ降りて、岩壁に歩いて30分程でたどり着いた。

●若者に託す ●平成20年1月、当会の若者に現地の発掘調査を依頼するため案内した。前門さんの健児の塔の駐車場から歩いて摩文仁の海岸へ降りて、岩壁に歩いて30分程でたどり着いた。

灯

わが子も無事に1歳になった。

1歳になったから別に楽になったわけではないが、少なくとも生まれてから数ヶ月間は、どうしてこんなに何もできないまま生まれてくるのかと思つた。一人では、誰かが世話をしなければ生きていけない。子どもの面倒を見ている間はほほ何

もできない。幸い今は、住む家があり、贅沢はできなくても十分な暮らしができる。この平和な世の中だからこそ、それを子育ての楽しみと思ふ余裕があるが、もしこれが戦争中なら、食べるものがなかったら、家が燃えてしまつたら、砲弾行きかう中を乳飲み子抱えて逃げなければならなかったら。

沖繩戦では、子どもを抱えた母親たちは、子どもが泣くと敵に見つかるからと、壕から追い出され、申し訳程度の岩陰に身を隠し、死んでいったという。

かろうじて生き残ることができたとしても、どんな傷を抱えて生きてゆくの。自分が傷つければ、わが子が目の前で息絶え、絶望と無力感に打ちひしがれた心の傷は癒しようもない。

他方、父親は徴兵され、人格さえ奪われるが、わが子を忘れられるはずもない。傷つき、ろくな治療も受けられず、苦しみながらもわが子を思い、死んでゆく気持ちにはかりようもない。

戦争は全ての人を不幸にする。二度と戦争を起してはならない。H

『沖縄戦戦没者遺体収容の旅』結果報告

第4回沖縄戦戦没者遺体収容の旅を開催しました。

本年1月18日より遺体収容作業を当会会員約40名(全国各地より、10代〜80代)の参加にて糸満市大度地区にて2ヶ所、摩文仁地区にて行いました。

大度地区では国道331号線沿いの斜面原野(以下原野、写真①)と

その場所から徒歩にて5分ほどの自然壕(以下自然壕、写真②)での2ヶ所にて作業を行いました。原野は勾配が平均30度ほどある斜面で草木を切り開くと一部遺体が露出しているところもありました。その周りを注意深く石や土を掘ると次々に遺体が発見されました。深さは深いところでも約20cmでほぼ表層に遺体がある状態でした。この場所からは遺体が一体ほぼ完全な状態にて発見されその頭蓋骨には銃創と見られる穴が見受けられました。また当時の生活用品などさまざまな遺留品も発見されました。この場所では少なくとも3体以上の遺体が収容されました。

自然壕は入り口に石組みがなされ戦時には臨時なごつた状態で発見されました。他軍服のボタや乾電池などの遺留品が発見されました。

今回発掘した遺体、昨年の「遺体収容の旅」以降当会が発掘した遺体は、沖縄県平和祈念財団へ仮安置し慰霊式典を行ないました。遺体は合計31体仮安置し、今回発掘に参加したメンバー全員で線香を供え、戦没者の方々のご冥福をお祈りしました。

国内の沖縄県でさえこのように状態です。政府は、「戦後処理が終わった」と言いますが、そのようにはとても思えません。海外では未だ野ざらしになっている戦没者が存在しているのが実情です。戦争の記憶が薄れていく時節、皆様にこの現状を知っていただき、一度戦争について考えていただければと思っております。

写真①



遺体収容風景

墓地へ続く階段より斜面に降った場所が発掘現場



収容した遺体

銃創

参加者の声

届けたい思い

回を重ねるごとに、参加者が感じる色々な思いを知ることが出来ます。参加者ひとりひとりの「気持ち」が、そして「力」が、多くの人々に伝わり、戦争の悲惨さを忘れず、また平和を自分たちの手で守っていく事に繋がっていくことを望みます。皆さんに届けたい参加者の思いを紹介します。

乙丸 法道



昨年引き続き2回目の参加だった。昨年初めに参加した時は初日から最終日まで緊張の連続だった事を憶えている。昨年は一昨年作業がされた場所の残りを見直し、ほとんど何も出てこない状況であったが、戦没者遺体の一部分が短時間の作業にも関わらず発見された事に強い衝撃を受けた。

その後作業の様子がテレビ等で映し出されるのを見て、次回は多くの若い人たちに戦争に触れてもらいたいと感じてもらいたいと思うようになった。そこで今回、職場の若年層に参加しないか声を掛け、私を含めて4人で参加した。昨年も衝撃を受けたが、今回は更に衝撃的だった。今回の作業地は、当時そこに実際避難されていた高田さんの証言に基づく



写真②

発掘現場(先印のある部分が入口)



遺体収容風景

原 和隆



まず、今回沖縄戦遺体収容の旅に参加できたことをNPO法人「戦没者を慰霊し平和を守る会」及び久労組に感謝しています。今回この旅に参加するにあたり、全く固定概念を持たず、目で見ただけ、実際に体験したことを素直に受け止めようと思っ

現代において平和学習が盛んに行われ、様々な場所の戦跡や戦中の記録に触れる機会が多いが、それだけに留まらず戦争は何をもたらすのか、これを自分の事として考えられる機会が増やせないだろうかと感じている。その意味でも来年以降、この遺体収容の旅へ参加してもらえよう取り組みたい。

今この国や県などの対応、国民の反応あらゆる状況から見て検討する余地は無い。戦争という悲しい過去をただの過去として、風化させるのではなく、その事を語り、伝えながら今からのこの国の平和を、そして、次世代の子供への平和を守っていきたく思いました。

初日の収容説明会で実際に沖縄戦を体験された方に体験談を聞いたとき、あまりの沖縄戦の凄さと日本の兵隊の方そして多くの民間人が犠牲になった話をきいて、胸が熱くなる思いと、なんとした犠牲になった多くの人の遺体を収容しなければと思いました。しかしそう簡単に遺体など収容出来るだろうかという思いもありました。そして2日目の作業は糸満市の自然壕や原野、摩

文仁という三ヶ所で行なわれ、たくさん遺体や遺品が出てきました。その中でも一番衝撃を受けたのが原野で銃痕が残る頭蓋骨が発見された時です。遺品の中には軍服のボタンや万年筆、たくさん銃弾などが収容されていきました。

小陳 武志



今も鮮明な戦争の記憶を生きている方々と、戦争を意識せずに暮らしている自分との対比が印象的だった。昭和40年代に生まれ育った私の子ども時代、戦後20年以上経っていたが、大人から聞く戦争の話はリアルで怖かった。「今アメリカが攻めてきたらどげんな

失をもつて問題の解消とすることは、良い方法ではないことは間違いない。社会に残っていた。

高田さんの話を伺った翌日に行った摩文仁の現場では、まるで、高田さんの記憶の世界に迷い込んだ気がした。南風原の病院でライトを全て消した時、発掘現場で土の中からつまみ上げた古びた電池が、戦時中通信隊が使っていたものだと言った高田さんから教えられた時、戦争の現場に居るはしな

松本 和太



戦場での別れの場面の話に、様々な「迎えに来るから」と言葉が出てきた。多くは、置いていかれる者も去って行く者も嘘を承知の「明日迎えが来るから」。その中で、仲程さんの話に出てきた「戦争が終わったら迎えに来るから」という痛切な言葉は、現場へ向かう高田さんが重いリュックをしょって杖を突きつつ水中を歩く姿にも響いてくる気がした。実態を承知している自治体として、なかなか動き難い、悩ましい問題だと理解するが、痕跡の消

今回、沖縄戦遺体収容の旅に参加させて頂くまでは、戦争という、昔の出来事として他人事のように考えていました。参加しなければ、実際に現地に行くこともなく、あのような場所に避難し、食べる物もなく、うかうかと寝る事も出来ない生活が想像出来ていなかった。初日に見学した沖縄陸軍病院南風原療養所は、とても病院と言えるような場所ではなく、ただ穴を掘った状態で、そこで手術をしていたなんて信じられませんでした。実際に遺体収容を行った摩文仁も、海岸沿いの岩山に囲まれた厳しい場所、どちらとも人間が生活できるような場所ではありませんでした。



収容した遺体・遺留品

この場所にて発掘したメンバー

壕から追い出されたり、避難場所もなく逃れた人たちが、こんな場所に追いつかれ、誰にも頼ることも出来ず自害したり、殺されたという事実を知った時は、愕然としました。



上瀬 寛子

遺体収容の旅への参加は今回が初めてで、たった3日間という短い期間でしたが、とても貴重な体験をさせて頂きました。この経験をふまえ、少しでも多くの人にこの現状を伝えなければいけないと痛感いたしました。

今回、初めて参加させて頂いた頂きました。初めは沖繩に行けるという事でうかされていました。しかし、高田さんや仲程さんの話を聞いて、実際に戦争を体験した方達の思いを知り悲しくなり、ま

た戦争は怖いものだ改めて感じました。私が発掘に向かった場所は、海辺のゴツゴツした岩を歩いて行かねばならないところ、予想以上に大変な場所でした。手榴弾の爆発熱で岩が黒くなって

いる場所がいくつもありました。25歳の私でさえ大変だと感じた岩場、このような場所にまで逃げなければならなかった辛さ。目の前に面する海一帯に真っ黒な軍艦がいた事。怖かっただろうなと思います。

発掘し始めてすぐに、高田さんの話の通り横たわった遺体が出てきたことは驚きでした。62年たった今でも、まだ多くの人が当時のまま倒れている。戦争は終わって、何不自由ない世の中になり、戦争というものがどこか非現実的な響きにすらなっている。現在だけでも、この遺体を前に「戦争はまだ終わっていない」という声が聞こえてきそうです。戦争の傷跡は現場にも、人の

心にもまだ確に残っている。決して終わってはいないのだと感じました。戦争体験者の高齢化に伴い、戦争の悲痛さを伝えられる人が減ってきている。今、より多くの若者達に現場を見て、話を聞いてもらいたい。今ある平和の過去を知って、未来の平和を築いていかねばならないと思いました。

まず始めにこのような貴重で尊い体験をさせて頂き「NPO法人戦没者を慰霊し平和を守る会」と組合員の皆さんに心より感謝申し上げます。

1日目、南風原(ハエバル)の病院壕を見学し、そこで行なわれていた負傷兵の麻酔なしによる腕足の治療、また切断と

いった、まるで生き地獄を思わせる話をお聞きしました。亡くなられた方の魂がまだ壕の中に残っている気がしてなりません。

2日目の収容は3ヶ所に分かれて行われ、私は大度(オオド)の自然壕で作業に参加しました。正直言って、戦後60数年たった今、簡単に遺体が出るのか半信半疑でした。ところが作業を始めて10分もたたない内、遺体の一部が見つかり、次々に遺体が発見され、私自身も岩の下にあった指の骨を見つけた。遺骨ではなく遺体です。参加者全員、作業終了時間を忘れ、夢中で収容作業を続けました。私も気付いた

ら「この暗い土の中から出してあげたい」という心の底から湧いてくる感情を抑えることが出来ませんでした。



写真③

私は沖繩の文化と自然が大好きで、年に一度は沖繩を訪れています。そんな沖繩で起きたことを自分の目で見てみたいと思ひ、今回の旅に参加しました。

現場へ行くまでは、出てきた遺体を受け入れられるだろうか不安もありました。しかし、始めると「早く家族の元へ返してあげたい。何か手がかりになるものが出てきて欲しい。」と思ひ、いつのまにか恐怖心はなくなっていました。

沖繩で地上戦があったことはもちろん、戦争の悲惨さも分かっているつもりでした。戦争体験者が指をさしたその場所から骨が出てくるという体験と当時の話を聞くことで、戦争がその場所

で起きたという事実と悲惨さを実感することができました。今回体験して知ったこと感じたことをたくさんの人に話していきたく思ひます。ありがとうございました。

この日たった一日の作業で、摩文仁の海岸から2体、大度の自然壕から6体、大度の原野の斜面から3体、計11名分の遺体を収容することが出来ました。

国を守るため亡くなられた兵士、民間人の中に間違いないかもしれません。しかし30年前から、国、厚生労働省の態度は、遺体収容は終了しているとのこと。日本は本当に豊かな国、経済大国なのか、私には疑問だけが残り

先の大戦、また、大勢の民間人を巻きこんだ沖繩戦を風化させないため、戦後処理が60数年たった今も終わっていない事を、現代を生きる私たちが子供、孫に伝えていく事が一番大事でないかと強く感じました。

私はここで貴重な体験をしました。作業中、軍手をしていましたが、途中で、写真を撮るために軍手はずしたときに、目の前に作業している人から、大きな大腿骨と思われる骨を渡されました。それをそのまま素手で受け取っていたのです。その時は、怖いとも汚いとも感じませんでした。何故、何も感じなかったのでしょうか。はやく土から出してあげたいとか、戦争から解放してあげたいなど、難しいことではなく、なにか無意識の感覚が私を突き動かしていたのです。それが「まだ戦争は終わっていない」だったのかもしれない。

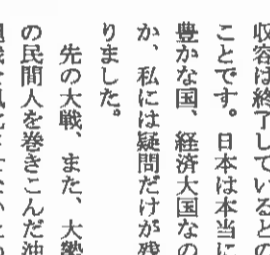
国家はいつた日何もの生々しい話を思い出すと、今でも震えます。それは、不思議な感覚であえて表現するならば、幽霊に顔をはなれたよ



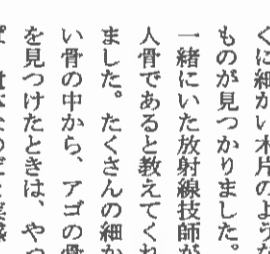
川原 良子



船津 勇一



嶋田 一秀



粕井 悠



日本労働組合総連合会から「愛のキャンパ」

今年で4回目になります。「沖繩戦没者遺体収容の旅」に対する地域助成を「連合・愛のキャンパ」に申請したところ、助成を受けることが出来ました。今回で3回目の助成となり、作業道具の購入及び現地での活動費などに充当させて頂きました。

この「愛のキャンパ」にご協力頂きました組合員の方々、関係者の方々に心から感謝いたします。ありがとうございました。

憲法9条堅持に関する 議会決議を求める要請書を提出

第21回参議院選挙候補者の皆様へ

各候補者の皆様におかれましては7月29日の投票日に向けてご奮闘のことと拝察いたします。

さて私ども「9条の会佐賀県連絡会」は二度と悲惨な戦争を繰り返さない、世界中から戦争をなくすことを祈りながら平和憲法、とりわけ9条を守る活動を行っております。

今回選出される参議院議員の皆さんは3年後の国民投票法の制定及び憲法改正の発議に関わり、日本の将来に大きな責任を負われることとなります。そこで国民の投票の判断基準とさせていただきますために右記の「改憲に関する公開質問状」ご回答いただきたいと思います。なにとぞよろしくお願いいたします。

(事務局) 〒849-0112

佐賀県三養基郡みやき町江口7561

9条の会佐賀県連絡会(代表 長野 遼)

「改憲に関する公開質問」

憲法9条に限定し、あなたの政策、考え方をお答え願います。

- 9条(1項、2項)も含め憲法を改正する
- 9条1項は残し、2項は改正する
- 9条(1項、2項)も含め平和条項(前文)を堅持する。

候補者名
所属政党
選挙区名
回答日 2007年 月 日

なお、7月10日までにご回答下さい

佐賀県知事
佐賀県内市町村長
佐賀県議会議員
佐賀県内市町村議員

各位

憲法第9条1項(戦争放棄)、2項(戦力の不保持)の堅持に関する議会決議を求める要請書

一子供たちへ、孫たちへ、そして日本と世界の未来へ残す遺産として一

戦後62年間、日本は民主主義ならびに平和主義を基調とする日本国憲法の下で今日まで歩んできました。とりわけ憲法第9条に謳われた戦争放棄、戦力の不保持、交戦権の否定は恒久平和を希求する日本国民の声として世界中へ発信されたメッセージであり、平和国家としての日本の地位を確固たるものにしました。

一方、イラク戦争における自衛隊の海外派兵や憲法「改正」を視野に入れた「戦後レジームからの脱却」、現憲法下での「集団的自衛権行使の研究」など再び日本が戦争をする国に向かおうとしているのではないかとこの危惧が国民の間に広がっています。しかしながら、むしろ日本国民が求めているのは「将来安心して暮らせる豊かで、格差のない平和な社会」であり、そのことが先の参議院通常選挙において明確に示されたのではないのでしょうか。

第二次世界大戦において日本人310万人の命が、またアジアの人々2000万人の命が奪われました。沖縄、広島、長崎の悲惨さを言うまでもなく、私たちは二度とこのような過ちを繰り返してはならないのです。子供たちへ、孫たちへ、そして日本と世界の未来へ残す遺産として日本国憲法第9条1項および2項の堅持に関する議会決議をここに要請いたします。そして地方自治法第99条の規定に基づき意見書として日本国政府へ提出されんことを同じく要請いたします。

2007年 11. 8

9条の会佐賀県連絡会
代表 長野 遼

佐賀県に対し、2007年11月に要請書を提出しました。

遺留品返還の取り組み

遺留品返還状況

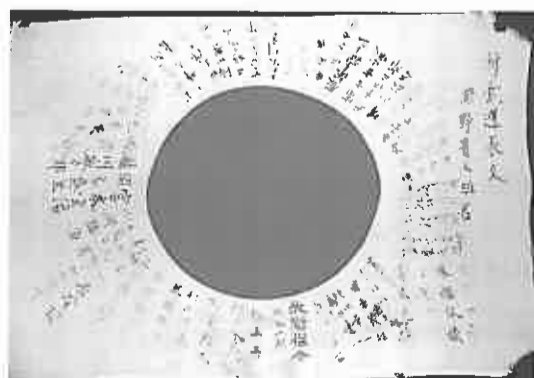
平成16年4月~20年2月現在

遺留品	旧所有者	依頼主	返還日	遺留品	旧所有者	依頼主	返還日	遺留品	旧所有者	依頼主	返還日
日章旗	安東日出男	Karen Harris	平成16年4月20日	日章旗	齊木松太郎	Howard Orechtel	平成17年3月17日	日章旗	浅井 竹三	Paul Tarlowe	平成18年4月23日
日章旗	児玉 甚一	Shannon Moore	平成16年6月27日	日章旗	高橋 一男	ストルツ 知子	平成17年3月20日	写真	光崎上等兵	Orville B King	平成18年5月16日
日章旗	菅森 正一	David Register	平成16年8月26日	日章旗	浦 等	Bettie Kirby Hansen	平成17年3月	日章旗	園田少将	Sue Ralls	平成18年9月9日
布	小林 與吉	Martin C Connor	平成16年9月2日	日章旗	永井 源市	Ray E Fahnestock	平成17年4月25日	印鑑	外山	国吉勇	平成18年9月18日
日章旗	大重 芳基	Joanne Davidson	平成16年9月7日	メモ	安橋 正雄	Dwight J Liggett	平成17年6月2日	写真	大河	Orville B King	平成18年10月24日
日章旗	石川 尚	Ned Frederick	平成16年9月12日	メモ	廣川 忠明	Dwight J Liggett	平成17年6月2日	写真	大城上等兵	Orville B King	平成18年10月
日章旗	大竹 利郎	Karen Banks	平成16年10月8日	メモ	柴田 恒作	Dwight J Liggett	平成17年6月8日	文具らしきもの	浜田少尉	国吉勇	平成19年1月21日
財布	及川 一郎	Robert E davis	平成16年10月9日	ハガキ	北島 一良	Martin C Connor	平成17年6月17日	手帳	西村 政美	Dwight J Liggett	平成19年3月19日
メモ	西村 てる	Dwight J Liggett	平成16年10月24日	メモ	立花 亮一	Dwight J Liggett	平成17年6月17日	写真	二子石 中	当会	平成19年3月30日
メモ	川口 茂信	Dwight J Liggett	平成16年10月25日	日章旗	齊藤 長次	Carl Bellon	平成17年6月	手紙	金子 助成	Marvin D. Veronee	平成19年4月9日
日章旗	佐藤 操	Martin C Connor	平成16年11月19日	日章旗	中尾 茂	Michael A Sedia	平成17年12月14日	万年筆	平田 左平	国吉勇	平成19年4月13日
シャツ	長峯 貞一	Martin C Connor	平成16年12月20日	通帳	高畑 弘	Richard Verner	平成18年1月16日	印鑑	井手元秋信	国吉勇	平成19年4月14日
ハガキ	小山 坦司	Walter H Cope	平成16年12月20日	写真	高畑 芳男	Richard Verner	平成18年1月16日	日記帳	西村 政美	Dwight J Liggett	平成19年4月17日
日章旗	内田 勝芳	Judith Richardson	平成17年2月7日	教科書	大城 義雄	琉米歴史研究会	平成18年1月27日	日章旗	神 石蔵	Eric S. Rasmussen	平成19年5月22日
日章旗	藤野 庄二	Roy Carter	平成17年3月4日	木札	山下 源蔵	琉米歴史研究会	平成18年1月27日	日章旗	相浦 信治	Paula Hebble	平成19年6月20日
日章旗	坂野 隆一	Carol J Nichter	平成17年3月7日	日章旗	苗加 源治	Kim Buyske	平成18年2月3日	日章旗	川村 鶴松	Candace Perez	平成19年6月26日
写真	赤坂 耕一	Carol J Nichter	平成17年3月7日	日章旗	五十嵐茶平	Ned Frederick	平成18年4月18日	日章旗	不明	Martin C Connor	平成20年2月27日

調査中の 遺留品



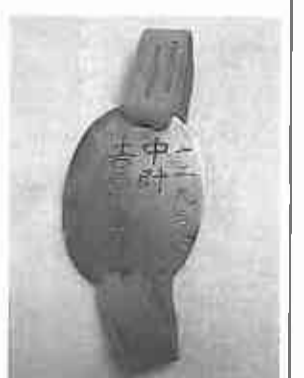
手帳(有川青峯)



日章旗(岡野貴久雄)



日章旗(緒方形廣)



認識票(吉原義則)

会員募集

戦争が平和か「参加しませんが、NPO活動」
平和の原点は戦争の反省から
起す者と、行かされる者(利益とリスク)

NPO法人 戦没者を慰撫し平和を守る会
入会申込書

私は、NPO法人 戦没者を慰撫し平和を守る会の主旨に賛同し入会します。

平成 年 月 日

住所 〒

氏名

電話番号

年会費 円 (1年分 法人1万円 個人3,000円)

寄付金 円

※年会費の支払は下記の口座にお振込をお願いします。また、入会申込書は下記へ送付して下さい。

<振込口座>
郵便番号 01790-6-5055
名義 戦没者を慰撫し平和を守る会

NPO法人 戦没者を慰撫し平和を守る会
佐賀県三養基郡みやき町江口7561
問合せ先 0942-89-5135

当会は、皆様の会費と寄付によって運営されています。

日比合同慰霊式典

(フィリピン・レイテ島)

当会では、毎年フィリピン・レイテ島を中心に、合同慰霊式典も行なっています。詳細につきましては、事務局(古賀)までお問合せください。

戦争でご家族を亡くされた方々に、戦地に赴き慰霊をして頂くこと、慰霊祭でお世話になっている小学校の先生及び生徒との友好親善を目的とします。

本年は、慰霊と電気探査による調査や遺体収容の試掘を計画しております。

【参加費】
120,000円
※参加人数や行き先によって多少変更されることがあります。

【日程】
平成20年7月28日(月)~
8月3日(日)

